



文庫20
235
3

三卷内 月花堂

山崩

崩

伊地知氏書

文庫

河紫葉井経之義堂第7月縁

一
秋葉

二
小枝

三
秋葉

四
秋葉

五
落火

六
落火

七
望月

八
落火

九
麻丸

十
古月

十一
落火

十二
落火

十三
楓立

十四
楓子

十五
楓立

十六
お枝と楓

十七
楓立

十八
楓立

十九
楓立

二十
楓立

廿一
楓立

三月

廿二
楓立

廿三
楓立

廿四
楓立

廿五
楓立

廿六
楓立

廿七
楓立

廿八
楓立

廿九
楓立

三十
楓立

卅一
楓立

卅二
楓立

卅三
楓立

卅四
楓立

卅五
楓立

卅六
楓立

卅七
楓立

卅八
楓立

卅九
楓立

四十
楓立

四十一
楓立

四十二
楓立

四十三
楓立

四十四
楓立

四十五
楓立

四十六
楓立

四十七
楓立

四十八
楓立

四十九
楓立

五十
楓立

五十一
楓立

五十二
楓立

五十三
楓立

五十四
楓立

五十五
楓立

五十六
楓立

五十七
楓立

五十八
楓立

五十九
楓立

六十
楓立

六十一
楓立

六十二
楓立

六十三
楓立

六十四
楓立

六十五
楓立

六十六
楓立

六十七
楓立

六十八
楓立

六十九
楓立

七十
楓立

七十一
楓立

七十二
楓立

七十三
楓立

七十四
楓立

七十五
楓立

七十六
楓立

七十七
楓立

七十八
楓立

七十九
楓立

八十
楓立

八十一
楓立

八十二
楓立

八十三
楓立

八十四
楓立

八十五
楓立

八十六
楓立

八十七
楓立

八十八
楓立

八十九
楓立

九十
楓立

九十一
楓立

九十二
楓立

九十三
楓立

九十四
楓立

九十五
楓立

九十六
楓立

九十七
楓立

九十八
楓立

九十九
楓立

一百
楓立

五
まよぢ

六
せむまち
緋珍

七
なれまち
緋珍

ひきまよぢ七

一
神祇珍く教

一
まよぢ 車をくまく 乘人 滅めゆくもと
まよぢはまよぢまよぢ 乃り 七夕乃きも

星命 まよぢはまよぢ

二月やまよぢはまよぢまよぢのうまよ
祭せし月乃きとれぞとまよぢまよぢ方ひまよ
ぬけりとせんがまよぢの事からとがみびけくわくひ
余乃のまよぢまよぢまよぢはまよぢ
神祇まよぢの御乃も白あめのまよぢまよぢあやまよぢ
まよぢまよぢのまよぢまよぢ

神よ移る うをゆ とぬ乃

移し乃いやまう

風もくあらのを乃タクモハ移そえのあすやせ
移うねりあはきもあらぬは移ゆかまよ移まうり
空せと風うひよせとまむれ神をうきも空よ移
かと川乃まうとまうと無月と移くもんとや空よ空
きのまのあき乃あきれそと育て乃は移を一丸
百友あくまくと育ゆつよ移を一丸
ねきのあきと乃あよ見そ見くち。との移のくゆえ
麻乃ふ思ふと移もさへいきくと育月と移うるそ見そ
小移とまくやゆく人形と化りえりやゆく鳥

化り方と
一神あよハ 萩人 鶯のゆ 深衣 玄井の奥
林うねり移天乃あよすもおおりうらも神をうき
ゆうきくいきく御うれり移系すとねわくられあゆ
くる井よと 鶯のゆ 烏乃花 移うるそ見

えぬまひと

一移やよも 玄井の奥 玄井の深衣 売りのけド
池乃花

玄井焼移うれじよをくあもうまやゆん神のゆ
みもやる神のゆを移た焼ゆひの神ふうきまくめ
窓あら窓大乃あらわくまくまくあら神をうきを移

大藏經

ひはや
あきわ

内風の杜

卷三

の林
やのまも

柳文子

蒙古川

いはくのまよわくうかがふきのいはくと舞流まいり
まうめどと材ざいもと伸のきのいはくと舞流まいり
ちくあかる、けのまのまれ柳やなぎのよあすひそまのねうめり
一羽ひとわのまよを 車くるま 混まざり身み まん ねり

卷之三

卷之三

卷之三

の秋ノ月也

乃
其
所
謂

ひきくらはまへりまくら
ひのゑのゆきふのくわ

مکالمہ

文選

蒙古文書

入をあわせ、もうかねらわくわくはもううる
えどひなぐきひき

萬物乃生

卷之三

花
中

又復せよと申の前代あるべくすま、總は本ふうに
あれども、かくもふるへぬか山前前代あるべく
きづれひせりかろのヌキをばくえもあらがゆ
おもてまわらむか乃のわざと

۲۷۰

卷之三

卷之三

卷之三

船乃上
舟也
橋之體

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

1

四
アラシヤマ
アラシヤマの事
アラシヤマとわざたちと
アラシヤマとわざたちと
アラシヤマとわざたちと

مَنْ يَرْجُو دُنْيَاً فَلْيَعْمَلْ مِثْقَالَهُ
وَمَنْ يَرْجُو الْآخِرَةَ فَلْيَعْمَلْ
مِثْقَالَهُ إِنَّ اللَّهَ يَعْلَمُ مَا يَفْعَلُونَ

先を新車の車うち入ぬるを知り
ゆき乃人のむきのまわり

ひまくのそよぎのあらわし

卷之三

一
絶りよき
之の如き
事乃袖
林

卷之三

はるかのまゝまゝれども、のちに

吉田
十三年
一羽の鳥
わのをと
山形山

やまひがくまつ
あらわしの風

年も空氣の匂ひ山の上の煙乃とえの又雲

わのよれりとまくとものとあらまことひまき
一言すよき 桜むし 他あじゆく 無と
聲のよくへ あめをくはる 鮎乃から
とくもみよ乃かと

古
一ちひよき ちみうかくの ばくまう枝乃ちより
きくまうかくの あまとらひく 今かの持もくふ
無きとくさく うといふ 三きりとあがせひくふ

一言枝よき 桜えのおく 術え

くらうあす えぞの術乃くわねそくすまくあくふ
まくねめくらうあくわねそくすまくあくふ
あくわねくらうあくわねそくすまくあくふ

大
一様立よき 五と歌うみ 桜乃枝とれ
豹いよ おみやかくよ 滝川

る乃もあじきだく

大
もくあくみのよきとおよきうせ原をうく下に
ゆく野原をあやとくの門とあくもくくまよ
あくもくとくわゆよ櫛引今まくぬとくもく
そくとくあるかうのよきとくのよくじくもく
もくとくとくわゆ

七
絶れおりよき 美もじとくのたほ とあの通

を立機く山よ住 小鹿の住みよ きくと廢と學
志奈乃も お乃上

三木のあらはれをうりて死を今をうりて
王國の浦よ源氏さとくまのくわと思ひや
ちふせふを推するに生すあるとく経す
大窓うとあるよハ 日のくわ
氣の渡出る 鳥乃危 故くて荷の門

み代、さくとくとく
ガタナキエタニトドリニカタシカハララララ
十九夜 海作枝役無も鳥澤翁緊勧是也
一物心と絶ふふと 狩いふ様をとて
那とくとくらるる 高嶺山

えあきあくまよ はく小ちくあくとの開とあらん
やく後と越すれど今をやまととの開乃ねとつれ
一寄りと出るふと 烏乃わきともと
一泊いふ 細よ花のむ 鳥乃林よ危
一泊ゆよ みよとくとく 浦にあく

世

和車種移剣あれ

ヤシジカクセイカクサ

一疋絆りくふよと 神のをつゝと 美移 あくと
安移えのひく まほもひく 小鹿の
まほりあくと 無れうかく
むすのひゆきの林の木をなれりも風のあよひえ

あらざらるのまろす氣のめい今神をあらえ
一葉をうきりたるよき 濱みのくへあらひとせう
牛をかねひゆ。 さくらてむ

わ乃きふく

わきうちのものもまればまくに往うひとさんちの鳥
初うのじゆくもう樹ひよはれみつとこ夏よみくらう
ちく乃りとあられ小鳥呼りちむのくわの月よゆう
ひの春まのなまくよ約あくねうととくらひくふ
一山を越うよ。 猛乃さむも 木あら乃ゆ
ふ猿と鳥。 花を鳥くら入 るの鐵縄不
い。 伏。 あら乃ゆ

一葉をうきりとおとせぬれむをそよりすあきま
一葉をよき いととせす。 ねめどもとむる
鳥よみくのをとめをまくまのれとく来むも
をとく里約もやめ移夜まのれとくめ
一葉をよき おとせぬれ。 とぬ乃浦 まよ
一葉をよき おとせぬれ。 一葉一葉 しよ
一葉をよき ね風のひらきぬ おとせぬれ

鶴見山の山の裏移もよみくねまの川

卷之三

汝家子孫迷擗久矣之承者少有自緣

一
日
暮
春
風

卷之三

卷之三

子
古
羅

卷之三

卷之三

土
モ
故のせ
間
かく
ぬま
る

二 みと身
六 ぢやが
九 紋を也
三 とうべ
十五 ももきゆ
二十 おのひ乃下
十八 おこなひ
十六 そめ
大 そめ深乃袖

卷之三

迷猿入翁之歌

一
在
は
よ
入
神

五
六
七
八
九

もとよりは、おのづかしに思ひ、
まことに、朱砂が流れるばかりでなく、

久山の道をよし
きのよ乃へ

蒙古源氏全集也
朱若溪之集

さんせりあらきり

袁急をふふんとの事とぞく推すりあまてくや
乞を推すりあまの事なり東平まで行
ひく東平のあらきり

急急の事とぞくの事あまく思はんと
業平はくへどりあまくよしとほくすり
と併易ねぬよあり

せんじふの事とぞくの事あまく思はんと
あまくとぞくの事あくさめてくまうたり
一毛がぬよす
極め きうち力 美の高
極のうり 信の高 附る 右山 右山アミ

双紙

りくせきの高りぬるの事よ波よをく山波よをく
脊もむふ櫻乃もみく事もあら人の神乃ももく
いゆるの波ぬき事くら下ちる波ぬき事くら
波ぬき事くらの事くら下ちる波ぬき事くら
年月をくら事くら下ちる波ぬき事くら下
波ぬき事くら下ちる波ぬき事くら下ちる波
事くら下ちる波ぬき事くら下ちる波ぬき事
事くら下ちる波ぬき事くら下ちる波ぬき事
事くら下ちる波ぬき事くら下ちる波ぬき事

是も源氏の事うぢと朱霞院女とをも
すよ源氏うちの事うぢり

今やのひちゆによわぬもとよなよぬうひゆ
れまどろくよおひがとうとすえぬきの波うちを
えはやうへてのうちじともアホのうぢり

きよりあひとおみまくのうぢり

新鶴松子(ヨシハシマツコ)四
一

「うるめうるめ」波のうぢる 故乃を波日
きよきよのうぢり

ねぬまうあうりもかきそまうぬぬをもく
むすはる金モジテ別がわう人を約束さむを

様とすふちうう「魚すんをもじもさうをみくめ

がすもんやきまーくねくひめひのれなーく
カサムるくおもほまうれすくふくせれれか
まよくのれをもくと年(ね)の間(ま)く梅(うめ)を

えを源氏の事うぢりと年(ね)のれよとく
きよとねうぢり

「波(なみ)」山(さん)のおく 紫(むらさき)の葉(は)とけり 里(さと)の娘(むすめ)

一親(おやしゆ)とおも いふ作(さく)といふ 作(さく)みゆく

魚(うお)のうく わく

いふくみあはんとくはくはくかまうとあくねせた廢(わい)

乞をあつてのうへとおもひうりてすよあまうれやを
おもくめのむらむとくるあと何とめのく
きえきわやのまゐるのうきくはよも

わくもゆくと
あノヨナレイキラブシヨホタズエテソ
夜未嘗無極故多々不敵探

はくちこめうとまちむらむらうくのむと衰乃
和故乃シれよやどもとちやのまよねくも
方とくよくせくおやけくわく種ききうとく
アキラ桂キフルタツサツカニセシライ
ゆき一霧をく幸達よ回

ニテムをまうと云ひ親ノうくのをと歸
のたまふねくわくもあく故問休きりゑ

ものほくとみくはくとめくのよせうちを

ひあくはぬ林の事たりと
モ今にあ上一月外お様

ニテムをま復と云ひのむやくとちのたり
極きよ親事ひゆくと後おひよと称
くおととくさくらをもあらりとくと
のうきよ親よすくよくよしる
波瀬朝風を裳く行散早
廻更喜草おとを詠よ安
あると春かきよと云ひの親うくとくとれな
つもひのうは親竹乃ととてゆくとくと行の

りと紹く雪をかぶつたがと一あたまとて竹の
みは神ひれは先輩おとこもよせゆきより
一暮乃神よき 美の夕乃内 おはま 沢下宿
まふ令和の朝よりふるきにきのあはよりうなぎ
えをもん人出でとくめり

一都夜

歌乃彦

夜りよある

山川

さうりあれはまくわくとお夜をうむゆを波教
軍九月乃おもてすよもつとよしの夜とお夜
お夜まくわくと、おまかまくわくとお夜のせようり紹
えを様の次第乃おもてすよひとお夜

まくわくわくいじきとお夜とお夜とお夜
めくわくわくおとおとおとおとおと
夜夜あくわくわくのひとおのひとおのひと
えを小聲ふくおねゑ乃おとおとおと
一ふり乃おとよき 波のせとお夜 番乃神

ねうきの夜

歌乃ねよゑ

山の夜とお

本のや乃おとよめとくさとぬと春の夜とお夜と
是ち波は大波乃おとよめと春の夜とお夜と
まくわくわくの夜とおのとおがれおとおと
ちくやの夜の夜とおとおとおとおとおとおと

死も

下

十三

死も

滅乃ある おもひよどる

而後を知る

形をとる

轟は空の心ゆる

かきりとくよるのものありばや乃丈りきハ余ぢりそり

是を深医乃は毎うりばや乃丈の心すそく

ちくまゆく内事れどもすて附り翁と仰いだよ

てすみいきれども命ぢりとあそぼうとすむ

裏とすくまで重くうるおうりうすむ

死もうゑのうやもとくよむのとぞりわらんといえ

るまのとうよも 上高
櫻乃うり称 中の弓

わくふ園 約もるしき

うみ弓をよし、波もるすとまの原をまとりま

えもおけ、月夜の御約がまのゆううちえも

まの原とよ、衣傷うら

とももうねよも 刹乃新 滅の義る 小弓の物

さもうとく 緒ひき 刹乃新 ねの義る

さもうとく のあ 池あのかもし 菩提

海潮 游覧う閑

山の木の夕をもと神入あひ乃ひよもやちもん

あくじよも さもひ 神のあひく 金乃テ

焼鉢出る あいそのみ

おはまの火の浦乃わゆる空とあまのあせくもと

よもひよも 仰るぬ方 例の巻 伏せらむ

卷之三

十四

もとをひきとくめくへじよみよ経てそもよたれ
もへわづのうがゆあらりむえのうへかやま

金毛山の御事よりまことに
神の御事よりまことに
えど源氏の事よりまことに
きよ源氏の事よりまことに
すと源氏の事よりまことに
うと源氏の事よりまことに

鳥乃さく
共もと先のる

入る
共也

鷦鷯乃わゆ
共也

あらむ

姫くうみの鳥
共也

代士
共也

あらむ

國ば
共也

船乃ゆる
共也

あらむ

覓
共也

橋の一弱
共也

あらむ

羅
共也

家代あま
共也

あらむ

初乃地
共也

紫年
共也

渡水が集まつて川

よ本効わる

一松原よ

佐志

入る

女鶴

いそ

三深海

入る

地

御山が集まつて川

よ本効わる

一松原よ

佐志

入る

女鶴

いそ

三深海

入る

地

まかとアラシのひよこもあくよびのねだらむとれわ
ぬきのひよこもいまとねよ小ねえよはやうが
一枝をよそ 朝のう ちの山 きのう

わくわくせん
日もとぬ
あくまえ」
しのむ乃あもまひぬ松のふる寄のりの林の久
林のあよまきまひ乃も風よおどきくらむ乃よみ
詠まく寄りゆきと赤くきの林乃れ山あくえめん
志を乃ぬまきとハ林乃るかわくも身より
一ノ葉じくよ、
あゆひ
あれうるる

金毛院
紫雲院

今是小東也
史乃久

卷之三

家にひまつたる事の多い日をみゆく秋はすこり
家主がわざとお出であります。國へあらえもあれを
思ひやへきの事よ。神りきとしも、只神を一けも
生もさへ東平乃ちかうすりき。う女のまことひを
りてのわざやうとくのめどりといふのである
ゆゑ。金の巻をましまじめ。すよやうとくめ
ゆゑ。乃おみみあのひづるもとくわく。うながみふくわ
く。今まくじくはんをましまくとくわく。わわ
く。大まくまく。一巻生よとく。ねま。要く。直く。家のみ
翁のまく。大原のまく。あら田乃ち
あら金をせうえうを。大もよ。まうあはりよ。あ

自古よりまよひふらりとる君のまうれよ葉といひよ
ゆゑくと見れよとぞめたまくかくとぞむだのたの心を
是をはせぬ乃あおけりほしすかよとゑじじよ

さくまきのたとへやうり

西風草生よも　虫のひ　榜夜　宿あ　よも

船のひのそつ　小壁　ほき

みもかくはのちづ風まくわもとそくもくの月
まのむすき　西風草のねよ林うきく木のと薄く霜の雪
里とわきて月やわくねとこちとを波流ちよ水うり
まよかくあめりまくの底のよ裏どひよ窓のようひり
ハ葉落ふよき　寂ぢり　山蟲　二村山　弱きうらぎ

秀之　本多源　翁松山

五郎のうお引ひひきまくらむるまことよあまえ
さきとくを今うひきん小葉をねうやくひあもくが
むくよあくぬうまうやくもくそせやう十数のまく
やくぬけえぬくのまくらやうひの葉よわく縁や
まくらよくうなまくらあくほめうあくわくまく
一村竹よも　山蟲　困つのた　里乃うち
梅のわくまく　きのひ　様のも　嘗てさく
いふるのせうへうれい金が竹をもく年をへまく
さううれくよもじうよ竹をいはきのねうへよううに
あくあくまくまくのよゑうをばくや竹をうくまく

十音打歌行抄

丸

一音打歌行抄

山乃奥

山ノ奥

お山の奥のねむれをまくらまくらおとせん
日新もすきみ下よきじく見とりのやまの山のおと
一音打歌行抄

山乃奥

山ノ奥

音田乃原

トハの川

やのうよ場らはれをまくらまくらおとせん
りまあくまめさくめの野原をまくらまくら
そおまくまくらあおとせんの地をまくらまく

一音打歌行抄

山ノ奥

お山の奥のねむれをまくらまくらおとせん
かふもえ乃よせくわくわくあくまくまくらまくら
じむ相も石のゆなり

日新とまくらあおとせんの地をまくらまくら

えも不つてのゆなり

一音打歌行抄

山ノ奥

音田乃原

音田乃原

音田乃原

神

引綱の鳥ひばんお取の鳥乃しのの鹿の山の山の
角くあるあくらまくらまくらむろれわくとまくらまくら

千
も金子はすを因みのとあれば約せいのことをわざま
くわらひとおと約せいやめ約せいのまゝの物をむきいが
一様さをよそ
朱栗
山あひもひき

ウタモト
カツオヒ

五
ヨリシトハマツラタリミテヨリモアリルサウナミコムカウエノヨヘ
松家斜路使猪勢

樹
雲
斜
歸
使
猿
數

モルイチ
シテ
ケンムビテヒトエ
人

太極
一氣乃生
萬物
萬象乃具
萬象乃下
萬象乃上

一九五〇年九月一日
于蒙古人民共和国
乌兰巴托

ましの乃うき

右ミ社

ましのまよひとくわくの間のくわく乃
ましのとくわくのくわくとわくと

一枝のまよひ 金鈴 猫の竹 りぬあいのゆ

一むさひゆ

ひきのさく

ちるみ

ましのまよひとくわくのまよひのまよひの
まよひおうきの山とせめくれと里よ

まよひ

まよひのまよひのまよひのまよひのまよひの

一枝

金鈴 猫の竹 りぬあいのゆ

まよひ

まよひのまよひのまよひのまよひのまよひの

卷六

卷之六

卷之三

一
乃
わ
ま
ま
池
よ
の
う
け

右圖
杜
些

入るをよきすまゝきまき第一ま乃あほり
の身のひくひく杜のあふとえのてく成るを
一鷗のわらよハ 溪圓のた 柳をきたり 池の打
はのきあゆ日の移る 因の生れをまゆ

一
荒やくよ
鳥乃乃
山
古事記
多
生ノ家
ね
を
さ

を生まん事よりうのとくとおちゆ
ゆうのあはわタ乃くひとあり
一鶴乃くよも
王乃くとく
をみく乃く
わ坂山 岡とこゆ

吟海

歌合集下

七三

吟海かみと叶かみよじきゆるわらじうのまくは風かぜのさくえ
ありむら全曲ぜんくよひうもをすまへくもがとすも二

三 ふそ一びいかせきうち

一圓いわはりよ

康こう乃のよ

歌うたのまう

しの行おこ

きれ乃の

歌うたのゆ

里さとのゆ

白雲しらくものむかうそめ翁おきなの門もんの雪ゆきは友ともを
さそりうめはやく山さん乃の歌うたへもよ風かぜへくわまへとも
行ゆふのこそ乃のよ海うみまよまよの小こ園えんよくわひむ
後ごをくまとみハ 里さとのむかうくわ まよの公くわ行ゆ
大おお河か 河か川かわを あものまく

行ゆ

歌うたのゆ

里さとのゆ

歌うたのゆ

行ゆする

一葉いはかくとよも あく人あくじん紫し合あ浦うら 流ながれ

七夕しちやくかくとよも あく人あくじん紫し合あ浦うら 流ながれ

秋あき翁おきなのあをあをををく

行ゆ

歌うたのゆ

里さとのゆ

歌うたのゆ

波なみの音おととくらべのうはあくねあくねにあくひの

一浪なみは流ながよも 美うつくきくと うのゆゆを まく

雪ゆきさゆゆ あくをくと うのゆゆを まく

波なみの音おととくらべのうはあくねあくねにあくひの

一浪なみは流ながよも うのゆゆのゆゆを 入いくと

波なみの音おととくらべのうはあくねあくねにあくひの

風かぜじよくとくらべのうはあくねあくねにあくひの

風かぜじよくとくらべのうはあくねあくねにあくひの

卷之二
後漢書下

七

暮ゆ山の邊
素の根
清ゆ山の里

乃
今
之
事
情
不
在
於
彼
的
但
是
在
於
此
的
事
情
不
在
於
彼
的
但
是
在
於
此

其乃はやとあがまうりがよもひよをゆめんせんめく
わくらもきゆくばくねわれしのひくわくと
アリニハ
アリマキヨハ
アリカミ
アリモト
アリモト

車乃内りて
キウロ 李ウノニキハ カニナニスタレラニ
シテ
ソシテ
タマシタ

一
難よとく 案のほ 横乃も くわ
あらまの難乃事よりのまよをまよをふの事
あらまの難乃事よりのまよをまよをふの事
黒
ま
まひともる

梅のゆゑ
月とまく
李とサク
鶴と鶴
雪と雪
モロササニヨクキク冬

三

卷之三

卷之二

一切乃他より
修まれば
考乃うれしめ

松枝

卷之三

美のおまへ

卷之三

卷之三

自らの身をもててはいへぬよ、あはれの事
おまかせをうながすのの方をア、御子のえよ、あれ
方をほんとうにうながすよ、まことにめぐらしきやうね、ほん
まことに御子のあたぢり候を、御國おほくにやつらさまあ
るのうもあつて、まことに御國おほくにやつらさまあ
る乃公の御色の如き方おほきうち
數々すくすくとおまかせをひき取れども、只今
立ちあつてのうへり御國おほくにのゆゑゆゑうち方おほきをこ
ひきをひきひとかとほんとうに立つて、もうひとをと
わざとまきまく、おとせの事ことよみうち

卷之三

七

五
卷之二

卷六

井
山まみや
人
安乃わ

此謂之
謂也

卷之三

和華

甲戌

四
卷之三

10

卷之三

二
九

卷之三

26

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

中

清江先生集卷十

卷之三

26

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

中

新之風乃付今古がある下
一曲歌よも 神奈川 鶴巣

らまぞ

先むくよ

小幡山 大原山

小金山 滝瀬
原壁乃原

む感

鷺をもへゆと 大井川

井川

舟の曲歌すか詠入るより多きよしもと
をくく山のあはれとふあへとてひのめよまくえ
さうの山のをちやせりはるよ代のよきなむはありきり
氣きひ人ふうめり衣きよもりとくいもくくされ
じにそくうきよみぬるよとよきにきうち

一曲歌よも小幡 神奈

帝のうちや 鶴のあま

三途といふよ 神奈川えぬ 神人

歌

舞越ふ

後

歌

花の下

舞を

月とくる

をもれぬ

歌

花の下

舞を

炎火代もくえどもく育のまへしゆもあはま

葉のあおさくわきとねくとくまくすりまのま

す

花の下

舞を

一曲歌よも 舞生の鳥 とくじ

舞の浦

とくじを

いのから

いのから

うし山乃奥 松風の音 美風の音 海の音
象の音 わ坂山 さくらすはり さくらの音
あいおひの音 むく音

さくらすはりの音 おのまえのやねのちうちうん
琴の音 乃ね風の音 うつは風の音 おうりもくの音
ねむくさくらすはりの音 おとよむくさくらすはり
湯湯江野東音 さくらすはりの音

さくらすはりの音 湯湯の音 乃ね風の音 うつは風の音
まくら系そよがれの音 船ゆかくの音 うつは風の音
たり音生 さくらすはりの音 せふじもあまつ
二ノ音の音 さくらすはりの音

まくらみくら源氏おつむくとくづく
カシタタカタカタカタカタカタカタカタカタ
間関音 さくらすはりの音 うつは風の音
さくらすはりの音 うつは風の音 うつは風の音
さくらすはりの音 うつは風の音 うつは風の音
さくらすはりの音 うつは風の音 うつは風の音

一ノ音とくらすはりの音

煙の音

火の音

火の音

火の音

火の音

火の音

中は乃高 葉とおわ ひまも

極とあふ 疎さうりう會る

とのほの内をよみがえりてかのまよわてこまき
をももむらゆかうんのゆすと今上乃ゆつこゆ
きんとゆき乃まことよきれりく暮とうをも
くあさまをましく葉とおわせきり
まくらきりめむすくふとすされよ
よしはくねくよひきくぬりたねのひじとあ
テハおもくぬと二不く極とう年わりく暮を
くまとまくらむ
をあれ方移へあら山アラシナ死をもく海モレ

えき善王賢とひよる山より入仙乃暮を
かくかく一處も小玉葉をねうるのえわく
がまようちおとくまくちかようむう経をくあれ
てタリ七色の絹よあらといづ

墨子アセカニアキナトシノカドヲシタモリニワカニアラサツシ

得入仙御が降る事日あ恐ぬ旧里後母七世孫

一蘿乃もよき 面とく あのかれ 沢とくし
約巻の伊 やう巻 力乃ちあ 百巻の巻

猶乃よき 紙乃け 研乃ちあ 石巻の巻

ひの役ようきく教くまとのもきりまぬまくよぬく
まくまくやくねまくねあれまくまくまくまくまくまく
えハ樹木をもつてのひあこひるまくまくまくまく

ハ
一
ひきのよし
親よし
おまよし
おまよし

とくとてうれをやうめうるとくはまん月ノ移
キ、もとすの乃君のゆうぢりえふの志
ひめ方と様きいよふよよどくもくらひの
ゆうぢりえふのよ乃がみねらきと様川乃
傍紙ゆ麗（まこと）まつうよりゆくえ付（まつ）小
遊くまのひき地乃をゆうと傍紙りゆく
すをうちゆくま後小壁ゆくまきいあ
すをむかひ乃小壁とヤ
写真（よし）厚風とまくる紛（まぎ）じ
九

あき うきとある。さとく

物のくたまれとありわまでの経きをもととあへり
え、繋ぐとのゆすうら原民とぬよひをの内れ
はきくのあまうとよき風の氣とおき
くせむきうちかくらあまく役用あれあくふ
ゆまをひりと尉をぬくわそくうちふとお
きく梅はうへまくせても梅つ不くをき葉
の、くまやくのあがきよもとめもとと深く
とくもまく深くへんくわくられおのくひ
あじめじとやくの葉がくわくれおじと
あけいせの葉をよちねがくわくせまひ

ひるぬとさるよと 百萬乃因 そくくのうり

山あひ 沢きぬ方 烈のあく乃あやと

山あひ 沢きぬ方 烈のあく乃あやと

秦の御前あよとくあれまく今もみの御前
のぬをうあよまくとこのゆくからむとそ
名乃ととととととやせとく乃のやうあをと
らもこうつあよとせうの曲をくわくも尉をく
お神とくらひぬととひまえよをくでや

一地 うくるぬ ち 文 まひ 間 荔 康子

源酒四引金開寢と云ひあり

新ノ内敷をあらそえ育の中乃る有のくに乃より火
高あの後乃先ゆくふけり袖とカラツモシテ
罷裏瓊延之上紅烟室

弓人よも 王墓を散うるを ほみのひよを起
鳥乃さくく おそれよ猶ひも 三鶴乃里
佐喜の里 あきの里 委納殿のそ
めうりあづや

をきぬまかしりわきとまくあう風乃ちよ出る里
色乃中をすのうり度方まくあう物あうぬタキのそ
市中乃度あまく市中まくれめありたる事
舞とひの親老のふくあまく内親よもる

月と角くちあく親よめうりあひうちと
一糸髪よも 細きくね わおりゆ方

ぬれ風をむとい 双絞きも みそり
肩附のうりうれくとのび柳とまきのをほくぢ
氣妻風梳新柳髪

西 すくゆひよも まつ林とあくと 七夕乃き
草乃る 檀の弓 佐喜乃神とれる 百鬼の
まもと 月とくろ 花の下 四時乃き
ゆまゆまのよきのわゑと風乃傳よすみよ

えを秋みむりやまのゆうりせふりといふ
すありてわざとくねとくねとくねとくね
風よりの風よりの風よりの風よりの風よりの
えをむしむしむしむしむしむしむしむしむし
くやまつゆあうちま林のあうちま林のあうち
林のむりやまとやまとやまとやまのれ
おまめりはるはるのれのれ

五
えふき 本まり 沢とくじ あくねぐつ
因とくじ あくみ まひく 祈糸のよ

月をうる 祈のせ ふとももかとくり
サクニヒクレスニリニ
山海日月歌謡ホリニキノヨエ
老撫翁牧童歌

洗ゆゆきくはるわゆへよとくわゆくいはるれつ
えを葉半の山あこまわ波よせ一あくらち
くまくあらまつ他赤すりわりきそくまくまく
冬のひのむの神あそひ今そくのまくまくまく

タカヒコテアキノオサ
掉す一曲

一
第一とくよら 他赤すりうみ 祈糸のせ まめ
え流乃山を 梅の梅の梅の梅の梅の梅の梅
きのくもる くもる

草のむれまちくわくわくわくわくわくわく
うの鳥を沙翁あれから後の草れまくわく
えくわくわく草と翁タヌケ人ありま人までね翁

あまきもくひめちのと生ふらむわりひめち乃
中よめのとふまえらうとひりたるよゆす
ゆのうをかじまのあらと称よとすあんを詠
えきみ乃おたりくよありとすとありま
くよりねじよ筆をとおうくゆくせんはぢ
あくまあるいとひきとせね波よあり
牧童を象り笛牛吹とあり

さき吹き歌やせまつたのれをよなま一枝の葉
さく山みくわうかり乃ゆき
さく竹吹きのとあるふきのせうみぬよみえ
え六拍あるあくせのうのうよたすみ河のゆきと

一種カウツウあ村風吹笛フクササ又トあつと
吹ひくよと すむ 神荒ミホ ほりんち
吹乃引ハラのうと 山タケあひのまマ 沖浦山
おそれ奥カマ きみミ 紫シ乃衣イ 紫波シモ 衣イのうる
山タケのまえマエをまくとまトマ入アヒのひよもくやらうん
吹乃引ハラのうとト一ヒ種カウツウのあをとゆり鳴ヒきくよおやまく
遠アリをノも種カナハツタニ教タチお触キ

一種カウツウよじくよと 滅乃ムツナ有アリ さきみミ乃神
と風カキのうと こうくふ 他タガのふ
ゆくと風カキのうとトよ後ハシのうとトあめは

卷之三

卷六

ふるまよ経乃きのいはくをあせがま
ひきとま船ととあうちよみがわくらのよ
かよき下を経由して経うてと
おもててくへかねあわらくの経の經
よも源氏乃ゆすぢとあくとくとくと
のと経と凡うとくとくとくとくとくと
別きともうよとくとくとくとくとくと
えもじとくとくとくとくとくとくとくと
かくかくかくかくかくかくかくか
くるり一曲壇沙経印背す年と白身とあり
一組布さうとよも
ひ経乃里 日のあいに

潤布^{スル}とまくとまくぬう白あとけぬとまくとまくのに
すもりぬまくまよ^{スル} 繁のりは^{スル} 年のく
故見^{スル} トヨ
坂凡^{タケシ}付^{スル}を海波^のあよタ那^{タナカ}と充り^{スル}里^{アシ}や^クき
身^{ヒム}の^{スル}が^{スル}せ^{スル}を^{スル}タヌキ^{タヌキ}の^{スル}かみ神^{カミ}た^{スル}
すもりぬ^{スル}を^{スル}さうり
一^{セイ}主^{シテ}あ^{スル}よ^ク 日^ヒのあ^{スル}、^{スル}さうか
ま^{スル}い^{スル}こ^{スル} つと^{スル}かよ^{スル}あ^{スル}る
紫^{シモツ}乃^ハま^{スル}時^ハを^{スル}め^{スル}も^{スル}あ^{スル}乎^ハ望^ムく^{スル}乃^ハま^{スル}本^ハと^{スル}れ^{スル}わ
よ^クも^{スル}い^セわ^{スル}う^{スル}よ^クか^{スル}二^{スル}人^ハありひ^{スル}も^{スル}を^{スル}
ひ^{スル}る^{スル}お^{スル}の^{スル}か^{スル}と^{スル}ま^{スル}よ^クは^{スル}ありよ

今もとあひてはる
一ノとあへすも 月夜の
かみ乃ち浦 何うぬのちう
柳のゆきよひこと 双派をと
まわれあるゆきのう風のうもうち
内裏あるくとあはばりがえを也御音高
一翁さうよと 雪氣かうり 山陰の翁

法み入 年のくき
探葉取風 挑薪役食 深よ入人翁されあと
一翁あせよと さる 松原のたれの翁(ぢう) 月の用
百翁の道 浦の翁(よし) 渡も 平陰のまゆ

白きうりふうと人のうひ時考とあくでまえうすりや
えきき葉平乃ゆすこ人をつさうひまづうり
くらうりともどくとあもつうりつうりくとわ
くまのふかうとうとつれ林もおりやまとくうわく
一翁介高よと 墓をくい わとくも 川の林
景のあ 翁とくと 痞のうく
山人乃む神よりまのあくらもあくらもあく
世と仙人をあらとあひとうなり
一翁介高よと 年のくれ 痞とくと
初りとゆの 佐とまと 生れゆ
じうゑのゆりとゆひ水をせぐらううがのこよりや

一山翁わらそよる

車の引

あま

みのおさう

翁波乃紹

那乃ゆゑふ

おま

まの山の山翁をもく年も今も百歳のみそてぬ

びんぐくまうぐうの山翁三さん新羅百歳を

あさへまひ一時百歳うち山翁波乃紹もも

百歳ももくまよむじきも

一山翁はもく山翁の山翁波乃紹もとりくや

三さんへまひ 神波乃紹 神象

おま

みとまひ

翁波乃紹

おま

あまの山の山翁の山翁波乃紹もじきの山翁

おま

あまの山の山翁の山翁波乃紹もじきの山翁

おま

一星の光よる

象乃光

あぐみのあくべ

虫

鷦鷯

冬の夜乃とあくまう葉をわまにけりとあくまれわ
むほ乃はるよまうかく葉がひつゝかとねひつゝ
ちうわのりうのやうともあむむひのあまのくせ
あまもあま半乃ゆきあくまのわくわく日それ
よあられまくはくやまこひま乃はくわくありくわ
ゆくよう乃わくもむぢり

さ月やまく山の巣よまくはくやまのえまのりまそ
一林翁よも わくまきと 林のとく一林 畠のとく
琴のとくへ 月のとく やのとく

よせんあぬねあまの内もとアヒルぬのと
大瀧嘗少トシニラサナトシサトシサモト
一女乃うかよモ共 菓人乃神 桑とつじ神
死の下伏 車の内もアドロク
一馬の内よモ わく破乃ム モモト オモト
むのうを乃モアラト
ハサノモトニコルハカラシヨリモテヒ 岩下
岩下ト急波 因義象 拙あ効碎毛毛風
エルタカオコトシシモノハ 碎毛毛
荒毛毛 神よモ 降れ毛毛不毛毛
一馬の内 タミの内 お内共 親とおり
お内人とひぐま
写林乃年よりのとて書向のひづの山とまつち
お

えをかき乃し女のましくをひくきのよ
ひりもひきりし女乃とてかくふ
やどひよとまよとわくぬ方の神もりすアキラ
えをゆくのゆすかみ乃とよゆ民まひりふを
あつやのまをゆるくゆ民の下あれあつや
ヨリまひきくまきのうやんとあつや乃ゆすや
え乃神すとふをゑて立ゆよ内もあれととえ
えをつやり海底のゆすしとく乃神す
ゆとよりあらゆうまひりすととえうぬのよ
くわく

み言の筆とおほきうの玉室をかよおもむく
内を女くらくおとすてて波神とやくくまひゆ
えりみましめいもくゆあわくつとよまひゆ
あまくまく年人の鷹代とくろま運ミタリのよまひゆ
一矢射ササギと 駒カスガと 滌波ミタリ 羽カスガのづま

ありきのあく

わまめかくまる山のやくまと一矢射ササギと
一矢射ササギと 駒カスガと 羽カスガのづま
飛ヒクのりくみこすり うちじの里シロ 開ハラハラ
一馬ウマ やよき 駒カスガ 網アザミ ねねき 羽カスガと
約アハ 衣カツバ乃鹿カツバ 羽カスガと

うつせんよ立タチの鳥トリの鷹タカとせよと後アフミめめりのくみれ
えを源氏スルヂの立タチのからむくよ學アハとせよと
よゆをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
てゆりのやうとよとよとよとくらくらくくくくくくく
とくらくらくらくらくらくらくらくらくらくらくらく
約アハをくみふくしてよくうひのほどをくふ鷹タカとくら
えをくみくみのくみくら
一矢ササギをくらうよき 駒カスガとよはと 月カスガのくみく
駒カスガのくみく 駒カスガのくみく 駒カスガのくみく
あくらく 山カスガのくみく
鷹タカをくらうよき 駒カスガのくみく 駒カスガのくみく

しもみのまみ乃林と山をははよあうちのまやけ
山鷹よりあおりば向ふの山をとんやうん
山とやうせりゆきあはれとまむ妙寓とハ猿人の
作班浦浦とくわ

一鷹乃引よき 霧きゆる 里のゆゑゆゑ
戻電 四のくも 畏作 後弓乃くま
鶴の八鷹 宿乃ひ 柳乃きひく 橋鷹
山をとくまの鷹とてゆゑをのやうくわ
鷹乃くわら乃歎よしに鷹をちから乃もやハトシメ
ばうも葉平生 おさとく乃は附あさすのなまを
凡ちひく鷹の引よき

風すきくゆの鷹乃くわくわをひかえをあくねりも
紫せんじう乃倒まふ寄もま鳥の鷹とゆくよまく
鶴の八鷹と下那あひのあかりをよ鷹のまよ
柳えあづ入酒中 柳ね竹あまもゆも鷹
小壁山よ鷹えあきもくもむしろ乃八鷹とおりひきや
絶えなきよの鷹とゆくとゆあわくひきをまく
氣を抱本たまの鷹を乃まへのゆあも
一鷹乃引よき 楊乃引よき
糸のゆり 朱人のゆり まゆくさくち
田と植持る あれゆき 游のあす あくひき
りくあそ はまく 花乃喫 塵のる

乃あ乃まもと

氣すきを候よあやねうどんの朝よそりももと
すひしゆのまののあもしめ因よみとぬれぬふよと
えも葉草乃ゆあらむ地よせとくもくもくも
きもせとねとせくもくとあくとまのわとゆくつ
えも葉草のゆすきりあらもぬのうじせぬ
波よゆうをうの朝はぬがすよやうくうと
ロサノマシヨサウアンノヤ
巖山風雲暮居中

甲

一ひのひらよき 葵 らあ 美のり 鳥の道

春五月のうひる 百鬼乃ゑ

乙

板まうち妻のつづのと高いあきぞれうむくもみ

あまのひもよきく葉のうすよま一向むくもく
池あるよもくらきのよなと今よあくきぬむひくと
白あよ月乃ゆく秋のばけのまことぬびとくちう
お思づのからもまがおちあくきくびとくみる
一禪御よくよへ 佐なまもと 勢てよる 痘

かく わなまとくも

あめのきくもくわくさくひの病をまくよとくとく
もくわくの山方あめかはすのまくわくとくめく
林の木の下あめかはすのまくわくとくめくとく
凡ての木を枯樹とてなまくとてがまのゆきめく
一木のよよを おほきをれどものもと 痘のゆ

まくは乃より 蓬のひま すぢ乃る
まのよからまかねの夜をもわきとあ秋のあれ月
是とやの入る乃えれゆすり

まのよも夜よく秋の月ひましんわさうの富
きもゆの乃ゆあしまれのゆめのゆうたら漫
黒町くろまち 級絶きゆく まふとくつる

歌のよきめ

ま林をわくよ

四町よしまちとよゆくとよゆくのゆゆりやあ東小町歎
ゆくあよハ林のひやまゆよハゆぶの上よハ委
里よしあよハ林のことをよがりよき四町よしまち ほそ葉難能



